

## 伝道者の書6章10－12節 「誰が知ろうか」

### 1A 力ある者との争い 10－11

### 2A 知っていること、知らないこと 12

#### 1B 知っていること

##### 1C 束の間の人生

##### 2C 影のような人生

##### 3C 自分のための人生

#### 2B 知らないこと

##### 1C 自分にとっての善

##### 2C 将来の事

## 本文

伝道者の書、6章を開いてください。私たちの聖書通読の旅は伝道者の書4章まで來ました。午後に5章から8章までを学びます。箴言の知恵を知るのはとても有益でしたが、続けて同じソロモンが人生の空しさの中で語った言葉にも、厳かさを感じます。私たちに主にゆだねること、任せることを教えてくれます。今朝は6章10-12節、特に12節に注目します。「**10 今あるものは、何であるか、すでにその名がつけられ、また彼がどんな人であるかも知られている。彼は彼よりも力のある者と争うことはできない。** 11 多く語れば、それだけむなしさを増す。それは、人にとって何の益になるだろう。12 だれが知ろうか。影のように過ごすむなしいつかのまの人生で、何が人のために善であるかを。だれが人に告げることができようか。彼の後に、日の下で何が起こるかを。」

私たちは前回、伝道者の書4章のところから、仕事の成功についての戒めを読みました。その成功でさえが、実は妬みによって行われている。また人を押しのけてまで行なっている、その孤独の中で行っているという空しさをソロモンは語っていました。そして5章に入りますと、神の宮に近づく時に、言葉数を多くするなという話を始めます。なぜなら、「私はこれこれのことを行ないます。私はこうです。」と言って、言葉数を多くして信仰のことを語っても、結局は、そのことを果たしていないではないか？という戒めです。そして、「仕事が多いと夢を見る。」と言っています。自分でこれこれを行なっていく、ということを多くすると、その自分の魂が現実のことよりも、憧れや野心、意味のない自信を持つてしまうことを戒めています。それで、6章9節に「目の見るところは、心があこがれるのにまさる。」と述べているのです。

### 1A 力ある者との争い 10－11

そして10節から12節までは、その心が期待していることがあって、その期待が裏切られる時に、「なぜ、こんなことになるのか。」という訴えについて取り扱います。憧れ、期待していることが、その通りになりません。自分でこうあるべきだという信念、それに基づいて動いているが、どうも空

回りしている自分を発見します。今、何かをすることではなく、静かにして主を見つめる。そして、自分としては不服だけれども、それでもそこにおられる主を見つめる。そこから、主が何かをされているかを見ていく。こうした訓練が必要です。ですから、基本的に心が、「どうしてこんなことになるのか。」という不満を述べ、それを直そうとしてもがいている、その心に語りかけているものです。

10 節を再び見てください、「今あるものは、何であるか、すでにその名がつけられ、また彼がどんな人であるかも知られている。彼は彼よりも力のある者と争うことはできない。」彼より力のある者とありますが、そのような力を置いておられるのは主ご自身です。主がその人を立てておられます。その人が何か間違ったことをしていても、それでも主は私たちの理解を超えるところで、ご自分の目的のためにその人を立てておられます。ですから、私たちが状況や環境に不平を鳴らすのは、主ご自身への不平となっています。

そして私たちの心は争っているのです。「主よ、どうしてこのようなことを許すのですか？こんなことは、起こってはいけないではないですか。私が何をしたからといって、こんなことをするのですか。」心から出てくる疑問や不満は数限りないです。しかし、このことも主が定められたことなのだ、言い争って何になるのだ、と言っているのです。主が預言者イザヤを通して言われました。「45:9 ああ。陶器が陶器を作る者に抗議するように自分を造った者に抗議する者。粘土は、形造る者に、「何を作るのか。」とか、「あなたの作った物には、手がついていない。」などと言うであろうか。」

そして、勇気をもって語らない、主の前に黙るということが必要です。11 節に、「**多く語れば、それだけむなしさを増す。それは、人にとって何の益になるだろう。**」とあります。私たちが口数を、主の前で少なくします。言いたいことは沢山あっても、主が何かをしておられるのだということを認め、黙ることを学びます。

ダビデはこのことを知るのに、とても苦労しました。彼の周りには、あまりにも不条理に思われる事が続けざまに起こっていたからです。詩篇 39 篇、交説文で読んだところです。「1-2 節 私は言った。私は自分の道に気をつけよう。私が舌で罪を犯さないために。私の口に口輪をはめておこう。悪者が私の前にいる間は。私はひたすら沈黙を守った。よいことにさえ、黙っていた。それで私の痛みは激しくなった。」この葛藤は続きますが、ダビデはその息子ソロモンと同じ結論に至っています。人生ははかない、その日々は短い。そしてどんなに盛んに見えても、全く空しい。人々は幻のように歩き回り、空しく立ち騒いでいる。しかし、「私の望み、それはあなたです。」と言っています（7 節）。主が今何かをなされていることを信じます。そして、これからも主が何かをなさると期待します。そこで 12 節です。

## 2A 知っていること、知らないこと 12

「だれが知ろうか。影のように過ごすむなしいつかのまの人生で、何が人のために善であるかを。だれが人に告げることができようか。彼の後に、日の下で何が起こるかを。」誰が知ろうか、と言つ

ています。ここでソロモンは、既に知っていることと、知らないことを挙げています。

### 1B 知っていること

### 1C 束の間の人生

まず知っていることですが、人生は「つかのま」であることです。新共同訳ですと、「短く空しい人生の日々」となっています。人生は短く、その日々を数えることができるようなものだということです。ソロモンが老年の時に、この伝道者の書を書いていることを思い出してください。年が若いときと、年を取ってからだと、どちらが、時が経つのが早いと感じるでしょうか？年を取ってからですね。子供の頃は、私はこの子供の状態がずっと、ほぼ永遠に続くのではないかと感じたことを思い出します。けれども、年を取ってからの一年と、例えば小中学校の時の一年は、まるで速さが違います。人生というものが「束の間」であることを、より悟るのです。

私たちの人生は、タイマーにかけて、残りの日数を数えることができるようながらい短いものです。しばしば、何か大きなイベント、例えばオリンピックがあれば、そのホームページにはオリンピックまで何日です、という日数カウンターがあります。私たちの人生も同じです。また癌宣告を受けた人が、余命これだけですと言われたら、そこから自分の命を数え、日毎に数えられることでしょう。しかし、私たち全員が、健常な人でもしなければいけないことです。短いのです。

私たちは先週木曜日、品川家庭集会で創世記 11 章を学びました。そこでセツからアブラハムまでの系図があります。セツが 600 歳の寿命であったのに対して、数代先のアブラハムの父テラは、205 年に減っていました。私たちから見ればとてつもない長寿なのですが、彼らから見れば、苛酷な現実です。アダムは、元々永遠の命から実を食べて、永遠に生きるようにされました。ところが、エデンの園を追放されて、930 年生きています。私たちからすれば、今から 930 年前と言つたら平安時代後期ですから、途方もない長寿だと思いますが、永遠からすれば苛酷な短い人生です。けれども、その寿命はどんどん短くなり、アブラハムの孫にあたるヤコブは、エジプトのパロにこう言っています。「創世記 47:9 私のたどった年月は百三十年です。私の齢の年月はわずかで、ふしあわせで、私の先祖のたどった齢の年月には及びません。」ヤコブは既に 130 歳生きていましたが、これは苛酷な短い人生であると言っています。そして、モーセが言いました。「詩篇 90:10 私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。しかも、その誇りとするところは労苦とわざわいです。それは早く過ぎ去り、私たちも飛び去るのです。」七十年あるいは八十年です。本当に、日を数えるカウンターを付けて構わない短さです。

そこで、私たちは今、この日にできる最善のことをしようと願います。これこれをしたいと無益な夢を描くのではなく、この日に、主に対して何をするべきかを考えるのです。主イエス様のためだけにしたことだけが、主が戻って来られる携挙の日に数えられます。「1コリント 3:12-14 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現われ、この火がその力で

各人の働きの真価をためすからです。もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。」主のためにしたことだけが残ります。同じことをしていても、人の目が気になって、人に見られていることが動機となって行なっていることは、火で焼かれます。(先週火曜日の東十条での学びで、「分け与える賜物」でこのことを話しました。) そうではなく、自分を裁かれる唯一の方、イエス様を恐れ敬って行なったことが、永遠に残るのです。

## 2C 影のような人生

そして、ソロモンが知っていることの二つ目は、「影のような人生」ということです。ちょうど日時計に影ができるように、私たちの人生は、吹けば飛んでいくようなはないものだ、ということです。私たちは、いろいろなものに拠り頼んで生きています。あまりにも拠り頼んでいるので、自分が拠り頼んでいることさえ分からなくなっている程です。私はいつも、椅子に座って、交わりの時に皆さんと話している時に、たまにある記憶がよみがえるのです。宣教地で、座っていた椅子が壊れかけたという経験です。今まで、疑いもしなかった、自分が全体重をかけて腰かけてもよい道具さえ、主の御心でなければ壊れてしまうのだ、という意識です。

先日、インターネットですごい写真と動画入りの記事を見ました。「世界で最も危険な通学路」というものです。中国、インドネシア、コロンビアなど、世界中の子供たちの中には、小学校の授業を受けるために、命の危険を冒して毎日通学している姿です。その通学路が 5 時間もかける崖っぷちであったり、片方のワイヤーが切れた架け橋だったり、急流の川をゴムタイヤの上に乗ることだったり、私たちでも一生に一度も経験したことのない、危ない道や橋やロープウェイを毎日、そこを通って生きています。私はそこで思いました、「神に信頼するということは、こういうことだ。」と。

ヤコブの手紙には、「主のみこころなら、私たちは生きていて」とあります。主の御心でなければ、私たちはたちまち死んでしまうのです。ヤコブは、「主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。(4:15)」つまり、私は日々、生かされているのだ。当たり前だと思っていることも、それは主がそこにそれを置いておられるから生きていられるのであって、それで生きている。だから、もしかしたら今日、死んでしまうかもしれないという健全な危機意識を持っています。「これはあって当然」と思ってそれで生活しているというのが、私たちではないでしょうか？それは自分の命を影ではなく、実体のように考えてしまっている証拠です。

「それでは、これをやって、あれをやって、それで安心してみたい。」と思っている人に対して、神は、「愚か者よ」と呼ばれます。金持ちの譬えですが、豊作だったのでそれを倉に入れて、「たましよ。これから先何年分もいっぱい物がためられた。さあ、安心して、食べて、飲んで、楽しめ。」と言いました。そして神は、「愚か者よ。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったい誰のものになるのか。(ルカ 12:20)」と言われました。そして同じように、宴会で楽しんでいるバビロンの王ベルシャツアルに対して、神はダニエルを通して、「神があなたの治世を数えて終わらせられた」と宣告されました(ダニエル 5:26)。その夜、ベルシ

ヤツザルはメディア・ペルシヤ軍によって殺されました。

### 3C 自分のための人生

そして三つ目に知っていることは、「人生は空しい」ということです。けれども、ここでは前回学びましたように、日の下で起こること、それだけの視点で生きようすれば、空しいということです。主イエス・キリストに対して行なったことのみが残るのであって、それ以外のことは無駄に終わるということです。私たちは、数限りない「思い煩い」の中で生きています。主に対して行なうこと、主に言われてから行っていること、これが人の生きることの全てです。ところが、それ以外のことをしていると思ってしまう。そしてやっている間に、それは自分が主に言われて行っていることではないから、そこに主がおられない。だから、自分の命がそこで吸い取られ、ちょうど吸引器のように吸い取られ、心はついにカラカラになってしまうのです。

私たちは、自分の今、していることが、果たして主に命じられて行なっていることなのか、主にあって行なっていることなのか吟味してみる必要があります。イエス様の親愛なる友人に、マルタとマリヤがいます。マルタはイエス様のためにいろいろなことをしていました。すると、いつの間にかイエス様のためにやっているつもりが、イエス様に指図するという本末転倒なことをしてしまいました。「ルカ 10:41 マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」マルタは、イエス様の御言葉を聞いていました。そうです、主と共にへりくだって歩むこと、そこを源にして出てくる力によって善を行なうこと、これだけの生活です。

### 2B 知らないこと

では、ソロモンが「知らない」としていることを見ていきます。

### 1C 自分にとっての善

一つは、「**何が人のために善であるかを**」とあります、自分にとって何が善であるか私たちは知りません。私たちが何か、主に対して言い争っている時に、自分にとってこれが善であると思っているら争っています。その善だと思っていることに反することが起こっているようなので、それで「主よ、なぜ、こんなことを起こされるのですか。」と言っているのです。

けれども、本当に何が善なのかを知っているのでしょうか。自分の人生に二つの選択があるとします。お金を持っていることと、持っていないこと、富んでいることと貧しいことのどちらが良いでしょうか？どうですか、私たちは普通に、「そりゃあ、お金を持っているに越したことはない。」と答えると思います。ところが、伝道者の書5章以降を読みますと、富に関わるいろいろな苦労が書かれています。金銭を愛すると金銭に満足しない、と書かれています(5:10)。富が与えられて、それにによって不幸な出来事が起こる、例えば強盗が入るとか、そういうことが起こります。富や財産、高

価なものを持っていることによって、心配や苦労、またもっと大切な価値あるものを失っていくという災いを被ります。

「人は、たとい全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありましょう。(マタイ 16:26)」とイエス様は言われました。つまり、地上で大富豪であっても地獄に落ちるのか、それとも地上で極貧であっても天国に入るのか、どちらが良いのか？ということです。しかし貧しいからといって、もちろんそのまま天に入れるのでもありません。貧しいことによって、むしろ物欲しさから心を悪くして盗みを働いたり、悪に手を染めていくこともあります。また貧しい人が富を持つと、その生活が豊かになるのではなく、初めから富んでいる人よりもはるかに肉欲に溺れた生活をするようになります。箴言 30 章 8 節に、アグルという人が言った言葉に、「貧しさも富も私に与えず、ただ私に定められた分の食物で私を養ってください。」とあります。余るほどあるにしても、足りないにしても、そうした物質のことで私の心が主から離れることのないように、という願いです。

では、健康であることと、病や苦しみの中にいることのどちらが自分にとって良いことでしょうか？もちろん、健康でいたいと私たちは思います。しかし、苦しむことによってどれほどの人が、信仰に至ったでしょうか？「詩篇 119:71 苦しみに会ったことは、私にとってあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」と詩篇にあります。苦しみや病によって信仰に豊かにされた人々は、例えば日本でならば、詩人である水野源三さん、小説家の三浦綾子さんがいます。アメリカですと、若い時にダイビングに失敗して、体が完全麻痺になったジョニー・エリクソン・タダさんがいます。健康でいる時よりも苦しみにいる時のことが、神に出会えているのです。

しかし、病の中にいるからと言って、その人が神に近づけているわけではありません。病によって、「なぜ神がこんなことをされるのか。」「なぜ、私がこんな風にならなければいけないのか。」と思って、苦みを持ち、神に対して、周囲に対して怒りを抱くこともあるからです。同じ苦しみであり、病なのに、なぜ正反対の方向に向かうのでしょうか？それは簡単に、「なぜ、私が…」という主語であります。「私」「自分」というものが真ん中に来ている時、そこには苦々しさしか残りません。そうではなく、「主がここにおられる。主は共におられる。この方が私を見ておられる。」と「主」が主語になり、「私」が後に来る時にそれは、とてつもない靈的命の祝福になります。

では、成功すること、失敗することはどちらが自分にとって良いことでしょうか？これも、私たちは分かりませんね。もちろん成功したいです。けれども、成功によって主から離れてしまうことは多々あります。むしろ、失敗しているからこそ成功する。失敗によって、主に拠り頼むことを学ぶ、主に拠り頼むことを学んだからこそ、成功していくても、それが自分に拠るものではないことを知ります。

このように、自分にとって何が善であることは分かりませんね。もし今、主に、「あなたは何を願うか？願うものを与えるから、言いなさい。」と言われたらどうしますか？答えは、「あなたが願わ

れているものを下さい。」としか言えません。自分には何が良いことか分からぬのです。それを分かっている方にお任せします。

## 2C 将来の事

そして知らないことの二つ目は、「**彼の後に、日の下で何が起こるかを。**」とあります。将来の事です。自分が死んだ後で、その後で何が起こるのかを知ることはできません。将来どうなるのか？を考えればそれだけ、絶望的になります。ソロモンがそうでした。自分の息子レハブアムが、愚かなことをでかすのではないかと、生きているうちから感づいていたのでしょう。彼は激しい空しさを感じました。自分が生きているなら、何とかその平和と繁栄を保つていいようとするのですが、どうも息子はこれを台無しにするだろうと分かっていたのでしょう。それで絶望しました。

しかもしも、「そんなことは知らない。だから主に任せる。」としていればどうでしょうか？」樂になりますね。自分のすべきことは、主に対してすること。主が残されるものは残るし、そうでないものは主が無くしてくださいます。それも良し、です。もし主によるものであれば、主が責任を取ってくださいます。「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日までにそれを完成させてくださることを私は堅く信じているのです。(ピリピ 1:6)」

ですから、今、与えられていることに集中してください。主がしておられることに目を留めてください。そして、主ご自身を一心に見つめてください。知恵を尽くして、今、自分が置かれているところにどのように主がおられるかを探ってください。主は生きて働いておられます。自分がそうではないと思っているところに、実は着実に主が前に進んでおられます。ただ主に命じられていることを、行なうのみです。しかも、明日終わるかもしれない命、その一日を全力を尽くして過ごします。